

シノプシス

1.概要

原書名：「黒い川と瑠璃の羽根」

著者：渡部良子（作）、竹井夏絵（イラスト）

出版社：バベルプレス

刊行日：2018/9/17

ISBN:978-4894495500

言語：日本語

分野：児童書

総頁数：44 頁

2.著者情報

渡部良子（わたなべ りょうこ）/作

福島県郡山市出身、横浜市在住。

趣味の絵本翻訳をきっかけに子育て時代にやっていたお話づくりを再開。

東日本大震災後の故郷への思いをベースに書いた本作が

B R M絵本作家オーディション最優秀賞を受賞。三姉妹の母。

竹井夏絵（たけい なつえ）/イラスト

種子島在住。株式会社バベル主催「星の王子様イラストコンクール」大賞受賞をきっかけにイラストレーターの世界へ。

これまで平々凡々に過ごしてきたためイラストレーターの肩書きに戸惑うも、CGを主にした作品を楽しんで描いている。

3.登場人物の紹介

カンスケ： 主人公

何の取り柄もない自分に自信が持てず、村で活躍する同年代の若者に引け目を感じているが、半ばあきらめ何事も人まかせな気弱な若者。

ライチョウ：山の頂にあるほら穴に住み、山の水を守る山の神の化身。

人間にだまされ神の象徴である金色の尾羽を抜かれて以来、人間に対して深い憎しみと不信感を持つ。尾羽を抜かれたことで神の力を失い、瀕死の状態にある。

長老： 村の知恵袋的な存在。その卓越した人格、経験の豊かさで皆に信頼されている村の

長。

五平：カンスケと同年代の力持ちの若者。おおらかな大男で、力仕事で村に貢献している。

与一：カンスケと同年代の知恵に長けた若者。その頭脳を生かし緻密で確実な仕事ぶりで村に貢献している。

4. 原書の内容要点と構成

街には夜通し明かりが付き、温度はエアコンが調整してくれる。季節の野菜がスーパーでいつでも手に入る。そんな技術は私たちの暮らしを劇的に豊かにはしてはくれたが、その見返りとして、人間が自然と共生する中で持ち続けてきた“自然への感謝”や、“畏敬の念”を奪ってしまったのかもしれない。自然とのバランスを欠いた暮らしには、どこか足元をすくわれるような危うさがある。本書では圧倒的な自然の驚異と、それに向き合う弱い人間の中の“勇氣”を描く。

美しい川が濁り、村人の暮らしが次第に荒れていくところから物語は始まる。

川の濁りを山の神のたたりと考えた村人たちは、山頂にある山の神のほこらに、供え物をすることを決めた。その役を引き受けた気弱なカンスケという若者が、山頂で山の神の化身である瀕死のライチョウに出会い、困難を乗り越えながら成長していく。

主人公カンスケの旅を通し、大切なものを守ろうとする人間の勇氣を、そして山の神の化身ライチョウを通し、自然の驚異と自然との共存の大切さを描く。

5. あらすじ

豊かな自然に恵まれた村の美しい川が濁ったことで、自然が壊され村の暮らしが荒んでいく。それを山の神の祟りと考えた村人達は、神の怒りを鎮めるため山頂の山の神のほこらに供え物を届けることにしたが、その役を買って出たのはいつも目立たないカンスケという気弱な若者だった。カンスケは途中、旅のあまりの厳しさに役割を引き受けたことを悔やむが、足を踏み外しそうになった崖で不気味な黒い川を見下ろし、故郷に迫り来る危機を目の当たりにする。ようやく着いたほこら近くの洞穴で、カンスケは人間を嫌悪する瀕死のライチョウに出会い、川の濁りの原因が人間に騙され尾羽を抜かれたライチョウの“人間への深い憎しみ”だと知る。ライチョウは、川を元に戻すには自分の背中に唯一残る“瑠璃色の羽根”を抜き、滝壺の水底に刺して清めるしかないと語る。その話に怖気付いたカンスケは、代わりに誰かを連れてくることを約束し村へと引き返すが、その途中川の状況が悪化しているのに気づき、一刻の猶予もない村の危機に呆然とする。

そして今は亡き両親の深い愛情や、村人達との温かい友情に満ちた村での暮らしを思うう

ちに、自分の守るべき大切なものに気づき滝壺に飛び込む決意をする。ライチョウの元に戻ったカンスケは、ライチョウの背から神の力が宿る“瑠璃色の羽根”を抜き、死の恐怖に打ち勝って滝壺に飛び込む。命がけでたどり着いた水底に羽根を突き刺した瞬間、川の水が激変し凄まじい渦に飲み込まれたカンスケは、やがて力尽き気を失ってしまう。

目を覚ますと故郷の村に流れ着き、村人達に囲まれていた。カンスケが急いで川を見に行くと、川は元の清流に戻っていた。カンスケの思いと瑠璃色の羽根が川を清め、瀕死のライチョウをも蘇らせたのだった。困難な旅の末に村に豊かな自然と平和な暮らしが戻り、カンスケ自身も強い人間として生まれ変わっていた。

6.分析・評価（市場性含む）

文体や語彙の特徴・難易度

平易だが、一部比喩的な表現がある。漢字がやや多めなことと、簡単だが読みがやや特殊な漢字がある。

内容の難易度

対象年齢以上（小学校中学年～）であれば、取り立てて難解な表現もなく、比較的容易である。

類書情報

モチモチの木

類書の注目度：名作

想定読者層

小学校中学年以上（4年～）

日本での受け入れの問題点

時代背景：村という単位で生活を支え合い、高齢者を“社会の弱者”ではなく、“経験豊かな知恵者”として尊重していた時代の暮らしぶりが理解されるかという点。

語彙：

ライチョウ・・・あまり身近ではない鳥であること。またこの鳥は自然由来の名前を持ち、古来より日本では信仰の対象として崇められていた歴史があるが、読者にそのイメージが持てるかという点。

瑠璃色・若草色・・・日本古来の聞きなれない色が想像できるかという点。

イワギキョウ・・・高山植物である花がイメージできるかという点。

しよいこ・・・見たことのない読者に理解できるかという点。

★（これらには、イラストが大きく貢献すると思われる）

外国での受け入れの問題点（英訳の場合）

日本の農村のイメージ： 日本の農村の暮らしぶり、四季のある日本の風土を理解出来るかという点。

ライチョウのイメージ： 西洋の一部地域で狩猟対象であったライチョウを、山の神の化身としていることに違和感を覚えないかという点。

信仰について：一神教と自然の神・・・キリスト教をはじめとし、1つの絶対的な神を信仰する読者層に自然に畏敬の念を抱き、信仰の対象としてきた日本人の宗教観が理解されるかという点。

語彙：しよいこ、ほこら、いろり、わら仕事等、日本固有の物があり、イメージしにくいという点。

日本固有の物や方言等を他言語に変換した際、原文のイメージやニュアンスを損なうことなく表現できるかという点。

★（一部を除いてイラストが貢献すると思われる）

セールスポイント：

1) 時事的な事項との関連

科学技術の恩恵に浴して、私たちの“便利で快適な暮らし”は成り立っている。

そんな暮らしが当たり前な中、忘れかけていた自然の恐ろしさを思い知らされたのが、東日本大震災であった。福島県出身の著者がその時感じた自然の驚異、そして故郷への思いが本書のベースとなっている。記憶に新しい自然の脅威は、多くの人の理解を得られるのではないと思われる。

2) 注目を集めると思われる点

本書のテーマである“自然との共存”は、国を問わず理解し易いテーマであるということ。
そして主人公が気弱で情けない部分を持つ、人間味のあるキャラクターであることから、親しみやすさや共感を得ることが出来ると思われる。

以上